

みかんの島とお盆のご縁

●故郷の島で生きる

私が暮らしている山口県周防大島は、温暖な気候を生かし、みかん栽培が盛んです。自然豊かで、休日には近郊都市からの観光客で賑わいますが、人口の減少は著しく、高齢化率51%という、いわば日本の未来を超先取り(?)したような所です。



白鳥ちあき

そんな私の故郷ですが、普段は人通りもほぼないような旧道にも、お盆の間だけは人の姿が見え、車の往来も激しくなります。海水浴客や観光客に加え、お墓参りなどのために帰省する人も増えて、あまりにも人が多いので、島が沈むと言われるほどです。

私は五歳のとき、それまで暮らしていた京都からこの島に引っ越してきました。次男だった父がお寺を継ぐことになったからです。

三姉妹の長女だった私は、成長するにつれ、早くこの島から出たい、お寺を継ぐことだけは避けたいと思うようになり、高校卒業と同時に、進学のため島を出て、そのまま就職、結婚をしました。

もう島で暮らすことはないだろう、と思っていました。ですが人生とは不思議なもので、はかり知れないご縁が重なり、会社員だった夫が、何と脱サラして周防大島で企業し、私は再び自分のお寺で暮らすことになったのです。

そして、私は今、僧侶であるとともに、夫と作った手作りジャム専門店の仕事もしています。お寺だけでは生活できないような過疎の島でも、夫が仕事を作ってくれたおかげで、生活できるようになりました。

●一番好きな言葉

島にUターンして、この夏で丸九年になります。が、帰ってきて初めての盆勤めで、私には忘れられない出来事があります。

あるご門徒のお宅にお参りさせていただいたときのことです。お仏壇の前でのお勤めが終わわり、ふと床の間に目をやると、見慣れた文字が書かれた掛け軸があるのに気付きました。

「この掛け軸って、もしかして私の祖父が書いたものですか？」

私がそう尋ねると、「あ、気付いてくれた？そうよ！前住さんが書いてくれたものよ」当時七十代で、一人暮らしだったその女性は、嬉しそうに話してくれました。

「亡くなったうちの旦那が総代じゃった頃、ちょうど庫裏の立て替えをしたでしょう。」

旦那は左官じゃったから、左官仕事は全部させてもらうたんよ。そしたら前住さんが、お礼につて、この掛軸をくれてね。今日は、あなたが初めてうちに参りに来てくれるのもあって、これを掛けて待ちよ。ちよったのよ。」

